

母なる

湖のために

琵琶湖再生法成立

準備を重ねた法案も、成立目前に何が起きるか分からない。それが国会という場所だ。

9月、東京・永田町。琵琶湖再生法は1日の衆院環境委員会、3日の衆院本会議でい

ずれも全会一致で可決し、16日の参院本会議で成立する手はずだった。ところがそこへ

「暗雲」が立ちこめた。最大の懸案・安全保障関連法案が事もあろうに同じ16日、参院特別委員会で採決される見通しが浮上。採決を巡って与野党の対立は激化し、国会は反対デモに取り囲まれた。結局、特別委員は安保法案の採決に至らず、琵琶湖再生法は同日午前10時過ぎ、参院本会議で「全会一致」で可決、成立。参院が空転する数時間前だった。

「闇夜」に針の穴を通すようだった。奇跡的です。あと半日遅かったらダメだった」と自民党衆議院議員の武村展英(43)(滋賀3区・2期)は振り返る。

2012年12月の初当選、昨年12月の再選時に公約に掲げ、自身初の議員立法で実現した琵琶湖再生法。テレビで見届けた衆院第1議員会館の自室は、いつものように陳情

① 綱渡り

安保国会 届いた熱意

や要望の来客続きで、喜びをかみしめる暇もない。国会議員の活動は決してパフォーマンスではない、そう考える武村は「やっとスタート地点。これからが真の勝負」と心に言い聞かせた。

議員自ら法案を起草し、国会に提案する議員立法は、そもそも成立が難しい。通常国会は150日間で、まず予算関連法案、次に内閣提出法案が優先され、議員立法の審議時間は会期末までのわずかしかない。それが今年、通常国会が安保法案のために95日間延長、9月27日までの戦後最長となり、時間確保のめどがあった。

それに加え、審議の場となる衆院環境委員会は既に法案3本を通し、新しい法案を待っていたことも幸いした。しかも委員長は、自民党の「琵琶湖の環境改善を促進する議員連盟」会長で元環境副大臣の北川知克(64)(大阪12区・5期)。父も環境庁長官を務めた北川は、環境問題への思いがひととき強い、またとないリーダーだった。

武村が事務局次長を務める議員連盟が、法案をまとめたのは昨年6月。2人は成立のために最も大切な、国会議員への事前説明に二人三脚で臨んだ。相手は、党内を中心に衆参両議員の幹部ら約80人。法案の目的や意義をねほり強く説いて回った。

武村はその間も、故郷の草津市に帰っては、水草が覆い茂る琵琶湖を視察した。幼い頃から釣り好きで、小学校低学年頃まではニゴロブナやタナゴなどの在来魚が普通に釣れた。

「あの頃の琵琶湖に戻って次代に残したい」。政治家を志したのも、その思いが常にあったからだ。県内各地で漁師の船に乗り、革靴を泥だらけにしながら環境保護のNPO法人と外来植物の除去にも

加わった。再生を望む地元の声も活動の源だった。「成立の秘訣? そりゃ、やっぱり足しげく通い、先生方に丁寧に説明するのみですよ」と北川が笑えば、「日本の社会って、そうやって泥臭く話し合い、分り合うものでは」と武村は続ける。

熱意と行動が終盤の綱渡りを乗り切らせた琵琶湖再生法。だが、全会一致での成立に至るまでには、思わぬ「試練」が、ほかならぬ党内に潜んでいた。(敬称略)

外来植物のホテイアオイやオオハナミスキンバイがはびこる琵琶湖の水路を見やり、「年々ひどくなる」と嘆く武村。官民で再生と保全に向けた取り組みが求められている(10月26日、草津市で)



琵琶湖再生法成立から2か月余り。その舞台裏に何が起きているのか。関係者の話や現場の報告を通して、「母なる湖」に思いを馳せたい。